

守り、伝える

4人の久留米藩主に仕えた 家老の肖像を修理

令和4年度、有馬照長の肖像画の修理を行いました。照長は、8代有馬頼貴から11代頼咸までの4人の藩主に仕え、藩士や領民の尊敬を集めた名家老と伝わります。



修理前の表装
虫食い穴が見受けられる



修理後の様子
元の素材を再利用して掛幅装に仕立て直した

修理前は、表装の裂（布地）と絹

の本紙に虫食いの穴が多数発生していました。本紙にはシミも複数あり、本紙を補強するための裏打ち紙は、糊の浮きやはがれが確認されました。さらに、掛緒（壁に掛けるための紐）が切れているため、展示に適さない状態でした。

《修理の内容》
本紙を清掃し、虫食い穴をふさぎました。今後の剥落防止のために、着色部分には剥落止めの膠溶液を塗布しました。裏打ち紙を張り替え、裏打ち紙と裂の厚さを揃え、折れ防止としました。

裂の虫食い穴や切れていた掛緒も修理され、再び掛幅装に仕立てられました。また、巻き収めた際の資料への負担を少なくするため、太巻き芯を新調しました。保存環境を整えられた本資料は、適宜公開・活用を進めていきます。

活かし、伝える

江戸時代に広川町で出土 銅矛の里帰り

本市が寄託を受けている銅矛2口が広川町古墳公園資料館「銅矛里帰り展」（11月19日～12月10日）で公開されました。

それぞれの所有者は秋葉神社（榎原町）と矢倉八幡宮（田主丸町）です。江戸時代、元禄10年（1697）に広川町の天神浦堤・田代堤より、合計18口の銅矛が溜池築造の際出土



現存する3口が一堂に会した

し、久留米藩領内の各神社に奉納されました。銅矛は、弥生時代後期の中広形銅矛で、現存を確認できたのは上記2口と高良大社所蔵の1口のみです。同展では3口揃ったの里帰りとなりました。

秋葉神社には文政8年（1825）に天神浦堤出土の銅矛、矢倉八幡宮には天保2年（1831）に田代堤出土の銅矛が奉納されたことが、それぞれの箱書き裏に記されています。

箱書きも、出所伝来が分かる貴重な資料として、銅矛とともに展示公開されました。



(右) 秋葉神社所蔵
(左) 矢倉八幡宮所蔵